

樟と榿の木

分子研の研究棟と管理棟との間に大きな樟が3本ある。これらは私が分子研に着任して間もない、1980年か81年の晩秋に植えられたものである。初めからかなりの太さで、クレーンを使っての相当大掛りな移植工事だったからよく覚えている。樟は常緑樹だが春には若葉が目立つ。3本とも同じように育てられてきたのだろうが、芽生えの時期に遅速があり、若芽の色もそれぞれに違い、研究棟3階北側の分子構造研究系のお茶のみ部屋からはよく眺められ、毎年目を楽しませてくれた。

研究棟の前の池の西側には2本の榿の木が植えられている。はじめは池の南側にピンクのハナミズキがあったが、あるとき突然枯れてしまった。榿の木はその後に植えられたように記憶するので樟よりは5、6年後のことだったろうか。こちらは細い、貧弱な若木がいつのまにか植わっていたという印象であった。ところが先日ふと気がつくとも枝葉がこんもり繁った立派な成木になっていて、どんぐりがびっしりとついていた。時の経過を感じた。

分子研の発足当時はレーザーが爆発的に発達した時代であり、基礎研究の唯一の頼みの科研費総額が200億に満たない時代でもあった。大学では到底手の届かなかった高価な機器を使わせてもらいに協力をよく利用させて頂いたものである。その後はからずも分子研の一員となり、頂いた創設予算によって自分としては新しいX線分光という分野に飛び込むことができた。こうした冒険は分子研という場が与えられなければ絶対にできなかったであろう。当時の助教は皆こうした恩恵に与り、そして日本全国に散らばっていった。

分子研も1975年の開所以来30年近くが経過し、その規模や性格も時代につれ変わってきた。80年のアニュアルレビューの名簿は僅か3頁しかないが02年のものではぎっしり詰まって10頁近くになる。同時に分子研のカバーする範囲もバイオにマテリアルにと拡大してきた。しかし、設立時の2つの目的、分子科学のピークとなる研究を行うこと、そして日本に欠けていた研究者の流動性を活発にすること、これらを実現し続けてきたことは誰の目にも明らかであろう。

来年度からいよいよ法人化がスタートする。新たに発足する自然科学研究機構の一員となる分子科学研究所の今後の展開は予断が許されないものがある。しかし、若木を植えて大きく育てる一方、移植した成木は分子科学という樹種の中でそれぞれに個性を發揮するという創設以来これまで分子研が担ってきた役割を法人化後も変わることなく担い続けて欲しいと願っている。

東北大学教授
宇田川
康夫